

伊蘇普物語

牧羊譯

其十一 蟻と鈴虫

ある冬のお晝頃、丁度天氣がよくって暖な時、大勢の蟻がよってたかつて、夏中貯へて置いた食物を穴から出して来て干して居ますと、一匹の鈴虫が、饑饉で以て、お腹をペコ〜にしてやってきました。どーか少し食物を頂戴といつて、蟻に願ひました。すると蟻どもが鈴虫に尋ねます「何故お前夏の中に食物を貯へなかったの」鈴「だってそんな暇がなかっただもの」蟻「じゃー何して居た」鈴「僕は毎日歌を歌って居たからなわ」そこで蟻どもは一度にとつと笑ひ出しました。「ハッハ、ハ、ハ、夏中丸で歌って暮らした程の馬鹿なら、冬になったら、飯も食べないでお床の中で跳つて居るのが普通よ」

其十二 兎と龜

ある時兎が龜に行き遭つて「まあ、何といふ短い足だらう、そして歩き方ののろい事といつたら、どうだ」といって冷かしました。すると龜は、ニコ〜笑ひながら「そりゃ、君が風のように速いかも知れないが、駆けくらになったら、僕が負けやしないよ」兎は夫を聞いて、馬鹿な、そんな事が龜さんに出来るものかと思つたから、すぐと駆けくらをして見ることに決めました。そこで二人は、狐を呼んで来て評定官になつて貰つて、向うの松の木を目標にして、一二三で駆け出しました。所が龜の方は一生懸命になつて、のろいけれども、決して休まないで真直に目標目がけて走り出しました。兎はもと〜駆けけるの、速いのが得手なもんだからなわに、龜なんかには負けるもんかと思つて仕舞つて

一向に氣を附けない、とうとう道側で腰を据へて眠り込んで仕舞つたのです。暫くして、目を醒まして『オヤ』と思つてさう夫から驅け出したく一生懸命に飛んで行つて、目標の所へ行つて見た所が、もーとつくの昔しに龜が來て仕舞つて居つて、『ア、疲れた』といつて休んで居た所でしたと云ふ。

### 其十三 炭焼と布澤し人

炭焼が自分の家で、毎日〳〵家業をして居ましたが、或日のこと途中で、布澤し人に出遭つて『どーだ、僕の所へ來て一所に、商賣をしたら。第一、一軒の家を二人で持つのなら、餘程經濟になるぜ』と申しました。すると、布澤らし人は『折角だがまー廢さうよ、二人で一所の内ぢや、とても商賣が六ヶしいから、なぜかといつてごらん、僕が眞白に布を澤らすとすると、君はすぐ、炭で以て又

眞黒くしてしまふからな』

牛は牛連といふことがあります。

### 其十四 漁夫の音楽

大變な音楽好きの漁夫が居まして、ある時、笛と網とを持って魚取りに行きました。先づ海の濱から突き出した岩の上の上つて、網を足の下に擴げて置いて、しきりと笛を吹き出しました。屹度魚どもが、此笛の面白さに浮れて、獨り手に網の中へ跳り込むだらうと考へたのです。所がどの位吹いても、中々魚が跳り込んで來さうにもない。とうとう待ち疲れて、笛を側に置いて網を海の中へ投げて見た所が、さう取たれとも取れたとも一度にとつさり網にかゝつた。岩の上に引き上げて見た所が、魚はピン〳〵網の中で跳て居る、そこで漁夫の曰くさ『全體貴様たちは、間違つて居るではな

いか、折角己が笛を吹いてやった時には跳らないで居て、己めてから面白さうに跳るてへのは随分馬鹿な話だな一

### 不思議の裁判

むかし〜ギリシアといふ國に、ひとりの學生が居りましたが、法律を研究する目的で、或る法律の先生の門には入つて、「御禮は何れ卒業して始めて裁判に出て勝つた時に御渡し致します」といふことで三年の間勉強して、卒業しましたが、夫つ切り中々御禮のお金を持って來ません。

そこで、先生もとうとうこらへきれないで、月謝請求の裁判を起しました。裁判官は二人のいふことを篤と聞いて「それは、どうも學生の方が宜しくない。三年の間習つた御禮は確に、先生に拂はん

ければいけない」といつて、とうとう學生の負けになりました。

それで、先生は「さー裁判でも己が勝つたから、どうしても月謝を拂はんければいけない」と學生に申しますと、學生は、済したもので、「イーエ 夫でも始めの約束は、私が始めて裁判に出て勝つた時にお拂ひするといふことでした、今度の裁判では私が負けたのですから、決して拂ふ義務がありませんといつて、中々拂ふとはしません、夫で裁判官も大に困つて、と〜此裁判は無期延期にしましたとさ。

### 兎と龜と

これも、昔ギリシア人の考へ出した事ですが、龜と兎と競走させるに、龜が兎よりどの位か前の